

自発表現

1. 自発表現とは

渋谷（2006：48）は、自発という文法カテゴリーについて、「通常は動作主体の意志の発動によって行う／行わないはずのある動作が、動作主体の意志とはかかわりなく、あるいはときにそれに反して、起こる（肯定文の場合）／起こらない（否定文の場合）」といったことを表す動詞の文法的なカテゴリーとし、「形式的には、①意志動詞を含む文にその意志性を奪い取る役目を果たす形式（＝多く自発の助動詞）を付加し、②同時に格の体制に変更をもたらす（意味的には、もとの文の動作主（agent）を、動作の（非）成就を経験する主体に変化させる）というヴォイス的な文の作り方をもつのが典型である」と説明している。

共通語では、知覚・感情・認識に関する他動詞の受身形（接辞「(ラ)レル」が付く形）と一部の多段型動詞の可能形（基幹エ段形に「ル」が付く形）が自発の意味を表す場合がある。日本語記述文法研究会（編）（2009：283-284）は、現代日本語（共通語）の自発文の例として、以下のようものをあげている。

- (1) 私には佐藤が犯人だと思われる。（他動詞の受身形）
- (2) あのとき何も言わなかったことが悔やまれる。（他動詞の受身形）
- (3) あの写真を見ると、笑えてしょうがない。（可能形）
- (4) 田中の話を聞くと思わず泣ける。（可能形）

以下の(6)は「(ラ)レル」の自発用法の例だが、(5)と(6)の格配置の関係は、能動文と受身文の場合と同様のものとなる。

- (5) 私が [動作主] 故郷のことを懐かしく思い出すのは、小学校の友達と会ったときだ。
- (6) 私に [経験主] 故郷のことが懐かしく思い出されるのは、小学校の友達と会ったときだ。

2. 自発表現の歴史

現代語（共通語）の受身形の接辞「(ラ)レル」（一段型活用）は、古代語の「(ラ)ル」（二段型活用）に由来するが、古代語の「(ラ)ル」の自発用法は知覚・感情・認識動詞に限定されない。また、述語に用いられる動詞が他動詞に限定されず自動詞の場合もある点、対象をヲ格で表示する場合もある点、動作主が文中に現れる場合に格助詞を伴わない点から見て、「受身文」よりも「可能文」に近いとされる（川村 2004・2013）。川村（2013）によれば、古代語の「(ラ)ル」の「可能文」の用例のうち多数を占めるのは、「潜在的な行為実現可能性の有無、すなわち通常の意味での〈可能〉〈不可能〉」を表す用法（可能用法：(7)(8)）よりも、「一回的な行為が意図したとおりに実現する」という〈意図成就〉の用法（意図成就用法：(9)(10)）であるという。

- (7) 五郎は百キロのバーベルを持ち上げられる。〈可能〉
- (8) この職場は忙しくて満足にお昼が食べられない。〈不可能〉
- (9) 今朝は六時に起きられた。〈意図成就〉
- (10) 耳を澄ませると、隣の物音がはっきりと聞き分けられた。〈意図成就〉

川村（2013）は、「(ラ)ル」の可能用法は意図成就用法から派生した後発のものであり、一方、自発用法と意図成就用法は「行為者の身の上に当の行為的事態が発生する」という事態把握をしている点で共通し、「行為実現の意志が伴わないままにその行為が発生」すると捉える自発用法から、「行為者の意図通りにその行為が成立」するか否かを捉える意図成就用法が派生したと説明している。

現代語の「(ラ)レル」につながる「(ラ)ル」の自発用法の縮小は、可能用法が確立する中世期以降に進んだものと考えられ、吉田(2021)は、「非意志的」の表現性が失われることによって、「る・らる」が「可能」の形式として拡張していったのだろう」と述べている。一方で、「(ラ)ル」の自発用法の縮小を補うものとして、「自然と」「思わず」のような副詞や「てしまう」「ないではいられない」などの表現(吉田 2021)があり、現代語においては、特に近世期以降に発達した非意志的な実現を表すテシマウ文が、古代語の(ラ)ル自発文に相当するものとして機能するようになっている。

3. 諸方言の自発表現

北海道・東北・関東の一部方言に生産的な自発形が見られる。(ラ)サル系と(ラ)ル系の2系列の形式がある(図1、図2参照)。

3.1 (ラ)サル系

主に北海道、青森、岩手にかけての方言で(ラ)サル系の自発形が使用されており(佐々木 2007、大野 2025、大槻 2025、竹田 1998・2020・2023、秀 2019、円山 2007、山崎 1994)、秋田、栃木、静岡の一部方言にも報告がある(秋田県教育委員会(編) 2000、大橋 1962・1963、小池 1982、加藤 2000、中田 1981)。多段型動詞は基幹ア段形に「サル」、一段型動詞は基幹(=語幹)に「ラサル」(または「ササル」)が付く。(ラ)サル系の自発形は多段型動詞に準じた活用をする。

佐々木(2007)は、北海道方言の(ラ)サル系自発形の用法について、「自発(非意図性を示す)のほか、可能、逆使役の用法がある」として、以下の例文をあげている。

- (11)a. 私はご飯が食べらさる。(=私は自然にご飯を食べてしまう [自発])
- b. このペンはよく書かさる。(=このペンはよく書ける [可能])
- c. 大きな丸が書かさってる。(=大きな丸が書いてある [逆使役])

また、竹田(2020)は、岩手方言の(ラ)サル系自発形の用法について、(12)のような自発、(13)のような可能、(14)のような結果の残存(=逆使役)、(15)のような自動詞的表現に分けて記述をしている。

- (12)a. ゆ／俺サ本がヨマサル。(読もうとしなくても読めてしまう) [自発：意志動詞]
- b. 雪がいっぱいフラサル。(雪がたくさん降る) [自発：無意志動詞]
- c. 何回解いても正解とチガワサル。(違ってしまう) [自発：無意志動詞]
- (13)a. 庭に隙間があるから、松の木がウエラサル。(松の木が植えられる) [可能(状況)]
- b. 先生に許可をもらったから酒を {×飲マサル/飲ムニイ}。 [可能(許容)]
- c. この万年筆はすらすらとカガサル。(書くことができる) [可能(属性)]
- d. 鳥は空がトバサル。(飛ぶことができる) [可能(全称的能力)]
- e. 私は盛岡弁なら {×シャベラサル/シャベレル}。 [可能(個体の獲得能力)]
- (14)a. 机の上に赤い本がオガサッテイル。(置いてある)
- b. 本に名前がカガサッテイル。(名前が書いてある)
- (15)a. 庭に木がウエラサル。(木が植わる)
- b. 洗濯物がタダマサル。(畳まる)
- c. 洗濯物がホササル。(干される)

中田(1981)は、静岡県大井川流域方言として、井川方言(現静岡市)、中川根方言(現川根本町)、金谷方言(現島田市)の(ラ)サル系自発形について記述している。まず、(ラ)サル系自発形を生産的に使用する井川方言、中川根方言の(ラ)サル系自発形は以下のような形態をとる。

表1 井川方言と中川根方言の(ラ)サル系自発形 (中田 1981 より)

	読む	見る
井川方言	ヨマーサル・ヨマーサール	ミラーサル・ミラーサール ミサーサル・ミサーサール
中川根方言	ヨマーサル・ヨマサル	ミサーサル・ミラーサル

また、3方言の(ラ)サル系自発形の用法を対照させると以下の表のようになる (中田 1981: 12 の<表>に各用法の代表例文と能力可能の情報を追加)。

表2 静岡県大井川流域3方言の(ラ)サル系自発形の用法 (中田 1981 より)

用法		地点	井川	中川根 高年層	中川根 中年層	金谷
可能 表現	能力可能：私はリンゴが好きだからいくらでも <u>食べられる</u> 。		×	×	×	×
	受容可能：このリンゴは腐っていないから <u>食べられる</u> 。		○	○	×	×
	許容可能：医者 ^の 命令で私は好きなものも <u>食べられない</u> 。		○	○	×	×
	全称的能力可能：人間はことばを <u>話せる</u> 動物だ。		○	○	×	×
自発 表現	心理・生理的動作：昨晚のテレビ、 <u>泣けてしまった</u> よ。		○	○	○	×
	無意志的動作：今日静岡でたまたま村長と <u>行き会った</u> 。		○	×	×	×
	意志的動作：びっくりして席を <u>立ってしまった</u> 。		○	○	○	×
中相動詞 的表現	助動詞的：紐でしばったら血が <u>止まった</u> 。		○	(○)	(○)	×
	自動詞的：泥棒が <u>つかまった</u> 。		○	○	○	○

以上によると、(ラ)サル系自発形の典型的な用法は、意志的動作が主体の意志に反して実現することを表す自発用法および意志的主体(個体)が想定されない属性可能、全称的能力可能、逆使役であり、意志的主体(個体)は存在するが主体の意志と無関係に実現することを表す状況可能、許容可能では許容度が下がり、意志的主体(個体)が実現を意図して行う動作が実現することを表す能力可能では使用できないと見られる。

3.2 (ラ)ル系

主に秋田沿岸南部(由利地方)から山形、福島にかけての方言で、(ラ)ル系の自発形が使用される(本荘市教育委員会(編)2004、森山・渋谷1988、渋谷2002・2006、白岩2012)。多段型動詞は基幹ア段形に「ル」、一段型動詞は基幹(=語幹)に「ラル」が付く。(ラ)ル系の自発形は多段型の活用をすることから、二段型の活用をする古代語の「(ラ)ル」に直接由来するものではないと見なせる。「なす」(他動詞)に対する「なる」(自動詞)のような、自然発生的な意味を持つ多段型活用の自動詞語尾「ル」を、自発形をつくる汎用の接辞として析出したものと考えられる。

(ラ)ル系の自発形については、森山・渋谷(1988)の山形市方言の「(ラ)ル」についての報告が先駆的な研究として知られ、渋谷(2002・2006)にも詳細な記述がある。以下の(16)は自発用法の例(森山・渋谷1988)、(17)は属性可能の例(森山・渋谷1988)、(18)は対象の変化の結果を表す例(=逆使役)(渋谷2002)、(19)は自動詞的表現の例(渋谷2002)である。

- (16)a. コノ 靴 オレサ ハガタ。(この靴が、私にはけてしまった。)〔自発：意志動詞〕
 b. ×ホノ 綱 キレラタキャ。(その綱がきれてしまった。)〔自発：無意志動詞〕
 c. 別ニ 帽子バ 脱グ 気デ イダノ ンネ。ヒトリデ 脱ゲラタンダ。(別に帽子を脱ぐ気でいたのではない。ひとりでに脱げてしまったのだ。)〔自発：無意志動詞〕

- (17) コノ 酒 ドンドン ノマル。(この酒はどんどん飲めてしまう。)[可能(属性)]
 (18)a. 机の上に花瓶が置ガッタ。
 b. 看板に変な字が書ガッタ。
 (19)a. (ひもを) ムスブー (ひもが) ムスバル
 b. (洗濯物を) ホスー (選択物が) ホサル

山形市方言の「(ラ)ル」は無意志動詞に付きにくく、(16c)のような例は「動きの責任回避性のようなものへと意義的な拡張を起こしている」ことによって許容されるという。(ラ)サル系の自発形で報告されているような可能の意味領域への拡張も制限されているようである。

福島方言の(ラ)ル系の自発形について白岩(2012)は、「自発」の用法を持たず、「逆使役」の用法でのみ生産的に使用される」としている。

3.3 (ラ)サル系と(ラ)ル系の関係

新沼(2023)は、岩手県気仙方言(ケセン語)の「(ラ)サル」と、福島・山形方言の「(ラ)ル」について共起できる動詞を比較し、以下のような表にまとめている。

表3 東北地方の自発助動詞と動詞の共起制限(新沼2023:125)

	無対他動詞	無対自動詞	有対他動詞	有対自動詞
ケセン語	○	○	×	○
福島方言	○	×	○	×
山形方言	○	○	○	×

新沼(2023)は、ケセン語の「(ラ)サル」が「使役の as と受身の ar の2つに分解される」形式であり、福島・山形方言の「(ラ)ル」が「受身の ar のみ」をもつ形式であるとする。さらに、「自動詞マーカーと他動詞マーカーがそれぞれ/r/(受身)と/s/(使役)に対応するということを仮定」し、ケセン語で「(ラ)サル」が有対他動詞に付かないのは、他動詞に内在する使役マーカーと使役接辞の as が競合するためであり、福島・山形方言で「(ラ)ル」が有対自動詞に付かないのは、自動詞に内在する受身マーカーと ar が競合するためである、とする。

「(ラ)サル」を使役助動詞と受身助動詞の結合形式だと見る先行研究には大橋(1963)や大槻(2025)があり、大橋(1963)は栃木方言の「(ラ)サル」の由来について、「[サセラレル]→[サレル]→[サル]という過程」を経て生じたものと説明している。しかしながら、「(ラ)サル」自体が多段型の活用をすることをふまえると(大橋1963には「サル」の活用表があがっており、多段型の活用をすることが確認できる)、「サセラレル」が直接の由来とは考えにくい。

「(ラ)サル」と「(ラ)ル」は、新沼(2023)が観察しているような共起できる動詞の違いだけでなく、状況可能の用法への意味拡張に程度差があると見られるが、「(ラ)サル」の「サ」は、「なる」(自動詞)に対する「なす」(他動詞)のような、多段型の活用をする他動詞語尾の「ス」の基幹ア段形に相当する形で、これに自動詞(自発形)語尾「ル」が付いたものと考えれば、「(ラ)サル」は他動詞(意志動詞)の無意志動詞化という自発形の機能をより明確に表す形式として発生したものを見なせる。

他動詞語尾の「ス」は、関東以西(特に近畿・中国・四国)の方言では「書かす」「見さす」などの使役形の接辞「(サ)ス」として析出されているが、東北の方言では使役形接辞「(サ)ス」がほとんど使用されないことは、他動詞語尾の「ス」が文法形式として析出されるにあたり、東北の方言では自発形の構成要素として文法形式化するという、方言差が生じたことを物語っている。

参考文献

- 秋田県教育委員会（編）（2000）『秋田のことば』無明舎出版
- 大槻知世（2025）「青森県津軽方言の接尾辞「サル」の諸用法とその起源—今別町方言を例に—」佐々木冠（編）『逆使役関連の形態法の広がり』くろしお出版
- 大野公裕（2025）「北海道方言「ラサル」の非対格使役分析」佐々木冠（編）『逆使役関連の形態法の広がり』くろしお出版
- 大橋勝男（1962）「栃木県江曾島本村方言の「サル」ことば」『国文学攷』27
- 大橋勝男（1963）「栃木県における助動詞「さる」」『国語』3、栃木県高等学校国語研
- 加藤昌彦（2000）「宇都宮方言におけるいわゆる自発を表す形式の意味的および形態統語的特徴」『国立民族学博物館研究報告』25-1、国立民族学博物館
- 小池清治（1982）「現代栃木方言の二、三の問題—自発動詞と東京アクセントの浸透について—」『宇都宮大学教育学部紀要 第1部』32
- 川村大（2004）「受身・自発・可能・尊敬—動詞ラレル形の世界—」北原保雄（監修）・尾上圭介（編）『朝倉日本語講座6 文法2』朝倉書店
- 川村大（2013）「ラレル形述語文における自発と可能—古代語からわかること—」『日本語学』32-12、明治書院
- 白岩広行（2012）「福島方言の自発表現」『阪大日本語研究』24、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- 志波彩子（2022）「自動詞・受身・可能・自発—自動詞的表現のパラディグマティックな体系—」『論究日本近代語2』勉誠出版
- 佐々木冠（2007）「北海道方言における形態的逆使役の成立条件」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨（編）『他動性の通言語的研究』くろしお出版
- 渋谷勝己（2002）「自発」大西拓一郎（編）『方言文法調査ガイドブック』科研費研究成果報告書
- 渋谷勝己（2006）「自発・可能」『シリーズ方言学2 方言の文法』岩波書店
- 高橋新（2019）「山梨県国中方言における動詞接辞「サル」について」『思言 東京外国語大学記述言語学論集』15
- 竹田晃子（1998）「岩手県盛岡市方言におけるサル形式の意味的特徴」『国語学研究』37
- 竹田晃子（2020）『東北方言における述部文法形式』ひつじ書房
- 竹田晃子（2023）「可能・自発と方言地理学」『方言地理学の視界』勉誠社
- 中田敏夫（1981）「静岡県大井川流域方言におけるサル形動詞」『都大論究』18、東京都立大学
- 新沼史和（2023）「東北地方における自発表現に関する比較研究」『分散形態論の新展開』開拓社
- 日本語記述文法研究会（編）（2009）『現代日本語文法2』くろしお出版
- 秀舞子（2019）「北海道方言における自発の助動詞サルの使用実態—主に世代差・男女差について—」『藤女子大学国文学雑誌』101、藤女子大学日本語・日本文学会
- 本荘市教育委員会（編）（2004）『本荘・由利のことばっこ』秋田文化出版
- 円山拓子（2007）「自発と可能の対照研究—日本語ラレル、北海道方言ラサル、韓国語 cita—」『日本語文法』7-1、日本語文法学会
- 森山卓郎・渋谷勝己（1988）「いわゆる自発について—山形市方言を中心に—」『国語学』152
- 山崎哲永（1994）「北海道方言における自発の助動詞-rasaru の用法とその意味分析」『ことばの世界 北海道方言研究会20周年記念論文集 北海道方言研究会叢書5』北海道方言研究会
- 吉田永弘（2021）「「可能」「自発」の歴史的対照—「る・らる」と「可能動詞・られる」—」『日本語の歴史的対照文法』和泉書院

（日高水穂）

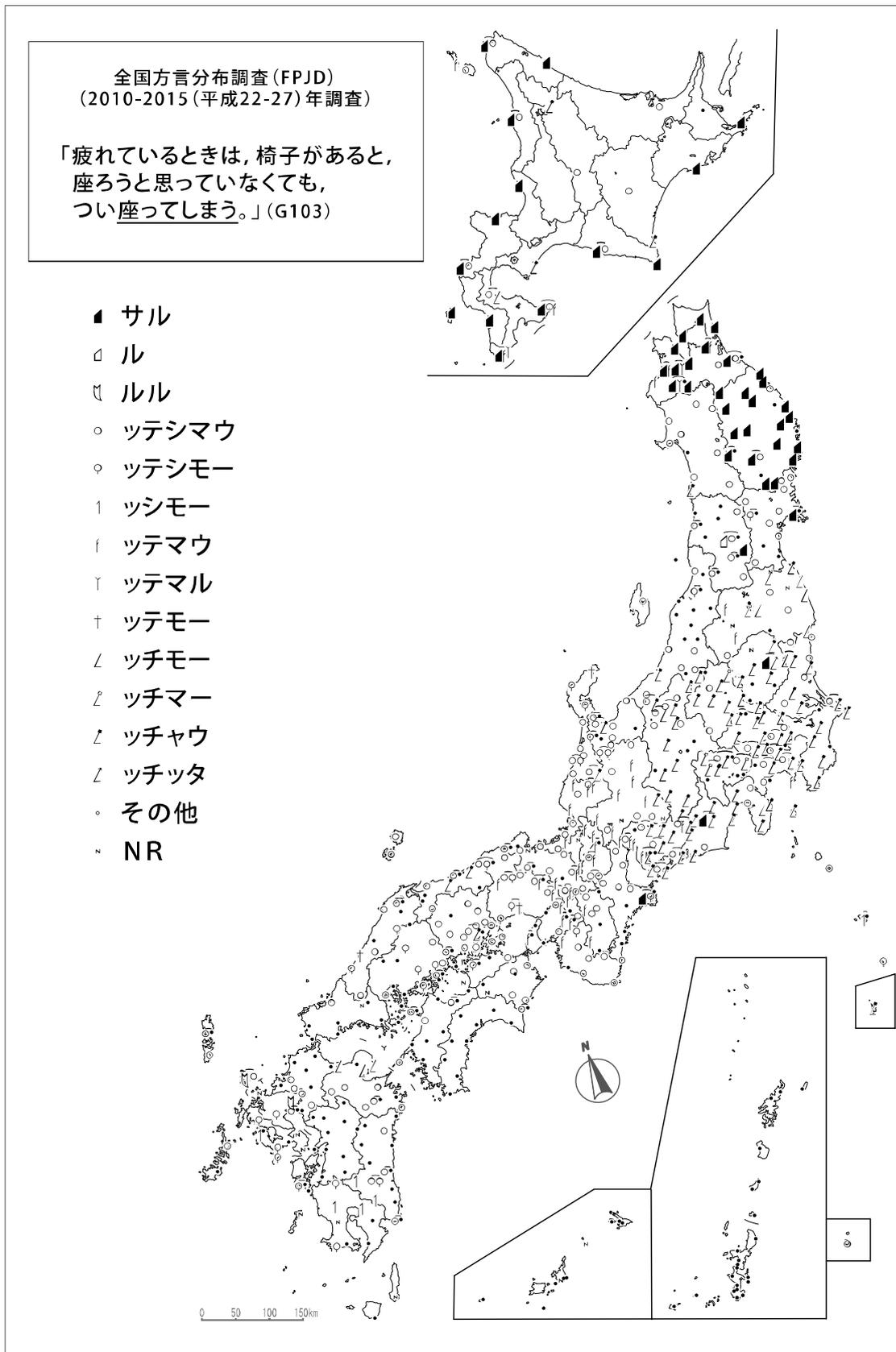


図1 自発表現「つい座ってしまう」(FPJD・G103) (竹田 2020 : 51)

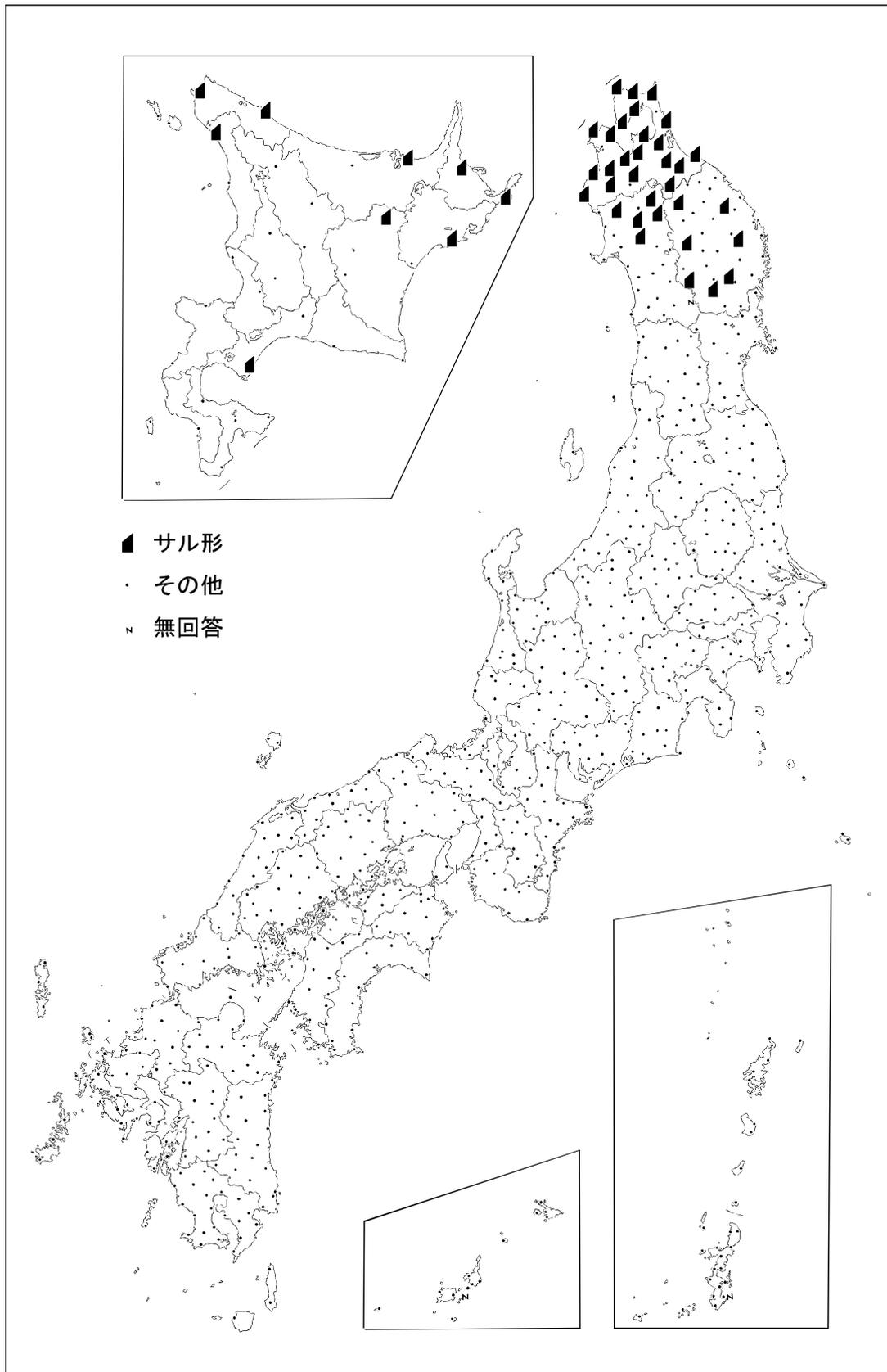


図2 属性可能表現のサル形 (GAJ181) (竹田 2020 : 53)

要地方言活用体系記述 自発形

【活用表抜粋】

番号	要地方言	多段型 書く	一段型 見る	来る	する
01	北海道北見市常呂町岐阜方言	カカサル	ミサル ミラサル	コササル コラサル	ササル サラサル
02	青森県五所川原市方言	カガサル	ミラサル ミササル	コラサル コササル	ササル
03	岩手県盛岡市方言	カカサル	ミラサル	コラサル	ササル
05	秋田県由利本荘市本荘方言	カカル	ミラル	コラル	サル
06	山形県山形市方言	カカル	ミラル	コラル	スラル

【解説抜粋】

『全国方言文法辞典資料集(2)～(5)・(7)～(9)』掲載の「要地方言の活用体系記述」の動詞の〈自発形〉の記述を抽出し、用語等の統一をはかって再編集した。〈自発形〉は、その専用形式が存在する方言において立項されており、受身形と同形の「懐かしく思われる」などの自発表現はここでは取り上げない。用例の出典については、元原稿を参照のこと。

01 北海道北見市常呂町岐阜方言

〈自発形〉

この方言には生産的な自発形がある。多段型動詞は基幹ア段形に「サル」が、一段型動詞は基幹(＝語幹)に「サル」「ラサル」が、「来る」は「コ」に「ササル」「ラサル」が、「する」は「サ」に「サル」「ラサル」が付く。「サル」のほうが「ラサル」より優勢である。自発形は多段型動詞に準じた活用をする。

- ・ニッキオ カカサル。(日記を書いてしまう。)
- ・オモワズ ジョウシノ カオオ {ミサル / ミラサル}。(思わず上司の顔を見てしまう。)
- ・ケッセキヨテーノ ユージンガ ポーンエン カイニ {コササル / コラサル}。(欠席予定の友人が忘年会に来てしまう。)
- ・アイツワ マタ チコクオ {ササル / サラサル}。(あいつはまた遅刻をしてしまう。)
(朝日祥之)

02 青森県五所川原市方言

〈自発形〉

この方言には生産的な自発形がある。多段型動詞は基幹ア段形に「サル」が、一段型動詞は基幹(＝語幹)に「ラサル」「ササル」が、「来る」は「コ」に「ラサル」「ササル」が、「する」は「サ」に「サ

ル」が付く。「ラサル」のほうが「ササル」より優勢である。自発形は多段型動詞に準じた活用をする。

- ・オソグナッテガラ カラサレバ ソンデッタ(遅くなってから刈ることになれば、そうだった) [市史]
- ・ドシテモ ソゴバレ ミラサル (どうしてもそこに視線が行く) [方言集]
(田附敏尚)

03 岩手県盛岡市方言

〈自発形〉

この方言には生産的な自発形がある。多段型動詞は基幹ア段形に「サル」が、一段型動詞は基幹(＝語幹)に「ラサル」が、「来る」は「コ」に「ラサル」が、「する」は「サ」に「サル」が付く。自発形は多段型動詞に準じた活用をする。

- ・おかしくて笑わさっててえへだった。(おかしくて笑えて大変だった。)(松本 a・「四方拝」)
- ・寝らえねどぎあ、天井板のふすあなひとつ、ふたっつつかじえでればいづのまにが寝らさる。(眠れないときは、天井板の節穴を一つ二つと数えていればいつの間にか眠れる。)(松本 a・「猫イラズ」)
- ・まっすぐ道を進めばごさこらさる。(まっすぐ道を進めばここに来る。)

- ・あの人あ、いつもあの飲み屋さ、ささってる。(あの方は、いつもあの飲み屋に、行っている。)(中谷 a・「ささる」)

(竹田晃子)

05 秋田県由利本荘市本荘方言

〈自発形〉

この方言には生産的な自発形がある。多段型動詞は基幹ア段形に「ル」が、一段型動詞は基幹(=語幹)に「ラル」が、「来る」は「コ」に「ラル」が、「する」は「サ」に「ル」が付く。自発形は多段型動詞に準じた活用をする。

- ・このペン、スラスラ書がる。(このペンはスラスラと書ける。)
- ・このペン、書がらぬ。(このペンは書けない。)
- ・明るくなったので、じっこ、行ったあとで見たば、木あ、いっぺえ切らって、積まってだけど。(明るくなったので、じいさんは、[動物たちが] 去って行った後で見たら、木がいっぱい切られていて、積まれていたそうだ。)

(秋田・「木っこりじっこ」)

(日高水穂)

06 山形県山形市方言

〈自発形〉

この方言には生産的な自発形がある。「自然にその動作・変化が起こる」などの意味を表す。多段型動詞は基幹ア段形に「ル」が、一段型動詞は基幹(=語幹)に「ラル」が、「来る」は「コ」に「ラル」が、「する」は「ス」に「ラル」が付く。自発形は多段型動詞に準じた活用をする。

- ・コノ ペン ヨグ カガル。(このペンは意外とインクが良く出る。)
- ・ヒトリダッターラ クララネツケゲド、フタリダツケガラ コゴマデ コラタノツダナー。(一人だったら来なかったが、二人だったからここまで来たよなあ。)
- ・オレワ ヤキューズギダガラ、テレビデ チューケー ヤツテット、ツイ ミラル。(俺は野球好きだから、テレビで中継を遣っていると、つい見てしまう。)
- ・ジテンシャデ ハシツテットギ、プリウスツテ クルマワ シズガダガラヨ、ウツショニクット ケーカイスラル。(自転車で走って

いる時、プリウスという車は静かなので、後ろに来ると警戒してしまう。)

- ・サイキン サツパリ テガ° ミアテ カガラネ。(最近ぜんぜん手紙なんて書かない。)
- ・イソガシクテ シンブンアテ サツパリ ミララネ。(忙しくて新聞などはぜんぜん見ない。)
- ・サイキン サツパリ ハダケスコ° ドアテ スララネモノー。(最近ぜんぜん畑仕事なんてしないもの。)

この「ル/ラル」はほかの地域ではあまり生産的ではないが、かつて周辺に広く分布していた可能性がある。山形県内や宮城県などには、「書カル」「貼ラル」などの動詞が語彙的にある。

(竹田晃子・澤村美幸)